小春日和の
セーラムドライブ

Satsukiya

「オグリキャップ号が死亡」

　毎朝目が覚めると省吾は、ＰＣの電源を入れ、ネットニュースを読むことが習慣となっていた。その見出しを目にして、「オグリが死んだか…」と、壁にかかる競走馬が大写しになっているカレンダーに視線を移して、独り言を呟いた。
　いつかこのニュースを目にする時には、もう少し感傷的な気分になるかと想像していたが、思いのほか冷静に受け止められた事実の方に、省吾はかえって寂しさを覚えた。

　競馬を人生にたとえると、寺山修司に怒られるかもしれない。スタートからゴールまでのうち、最後の直線が文字どおり人生の集大成の時期とするならば、そこへ向かって全力で加速を始める４コーナーとは、何歳頃のことなのだろう。
　人生の起伏や緩急は人それぞれ違うものだから、もちろん正解があるわけではないが、省吾は自分にとっての４コーナーは、22年前のあのオグリキャップが駆け抜けていた頃ではなかったかと、コーヒーのペーパーフィルターにお湯を注ぎながら思っていた。

　22年前、某企業の新入社員だった省吾は、本社研修終了後の６月に、ある地方都市の支店に仮配属となった。それは年末までの半年間の実務研修であり、終了後には新たな本配属先が決定されることになっていた。
　その小さな支店には支店長以下数人の男性社員と、一人の女性社員がいた。その女性の名前は「美里」といった。美里はその地方都市の短大を卒業した現地採用の事務員で、省吾と同年齢だった。彼女は短大卒のため省吾より２年早く就職していて、初めての都市で右も左もわからない新入社員に優しく接してくれた。
「転勤になって知らない街で一人暮らしをしているとな、夜や休みの日に人恋しくなって、すぐコロっと誰かを好きになるから気をつけろよ」
　省吾が一足早く社会人となった大学時代の先輩から言われていた言葉だったが、そのとおり、省吾が美里と過ごす時間を心の拠り所とするのに時間はかからなかった。

　省吾は、支店からは約５キロ程離れた場所にアパートを借りていた。美里の実家がそこから500メートル程しか離れていなかったのは偶然だったが、この偶然が二人が恋に落ちる必然の大きな要素となっていたのは間違いなかった。
　親しくなって程なくして、デートといえばもっぱら省吾のアパートで二人で夕食を取ったり、テレビを観たりするようになった。社内恋愛に寛容とはいえない職場の同僚の目などを考えても好都合だった。

　美里は病気がちで休職中の父親とパート勤めの母親との間の一人娘だった。競馬場や場外馬券売り場のないその山あいの地方都市で生まれ育った彼女は、家族や友人など身近に競馬を嗜む人

がいないこともあって、それまで競馬と全く無縁の人生を送っていた。

　10月末の土曜日、省吾は夕食後のテーブルの上に競馬新聞を広げて、翌日のレース検討をしていた。食後の片づけを終えてキッチンから戻ってきた美里が、
「省吾、眉間に皺が寄ってるよ」
　と笑いながら、省吾の左斜め前の椅子を引いて座った。
　競馬新聞の一面見出しには、『芦毛二強対決』と大きな文字が書かれていた。

「明日、天皇賞っていう大きなレースがあって、前評判ではこの２頭が強いって言われている馬が対決するんだ。両方とも芦毛なんだよ」
「芦毛って何？」
「馬の体の毛の色。たまに灰色っぽい馬がいるだろう。あれのこと」
「どっちが速いの？」
「うーん、俺は競走馬が一番強くなると言われている５歳の秋を迎えたこのタマモクロスの方が一日の長があると思うんだけど、こっちのオグリキャップは一つ年下なんだけど、そういうこれまでの常識を覆す強さがあるからなぁ…」
　省吾は、馬の強さを「速い」と表現した美里の言葉に若干違和感を覚えつつ、新聞を指差しながら質問に答えた。
「競馬って、面白い？」
「俺にとってはね。競馬っていうとイコールギャンブル、身を持ち崩すって決めつける人もいるけど、そんなことないんだけどなぁ…。そうだ。ちょっと馬券買ってみるか？」
「どうやって買えばいいかわからないよ」
「いいんだよ。名前が気に入ったとか、顔がかわいいとか、で」
「省吾はそのタマモクロスの方を買うの？」
「今のところはそのつもり」
「じゃぁ、私はもう一頭の方を買ってみる」

　翌朝早くにアパートを出た省吾は、在来線の特急と京王線を乗り継いで、東京競馬場に向かった。今日の天皇賞は、学生時代の友人の辰野と近況報告を兼ねながら現場で観ようと、数日前に電話で決めていた。先に到着して指定席を２人分購入しておいてくれた辰野と競馬場の正門前で落ち合い、入場門を通った。
　東京競馬場のスタンド３階の指定席エリアは、さすがにＧＩレース当日だけあって混雑していた。この指定席エリアの高さからだと広大な競馬場のコース全景がよく見渡せる。
　正面には多摩丘陵、その手前には松任谷由実の歌の歌詞に出てくるビール工場と中央高速が見え、秋晴れの今日は３，４コーナー中間の遠く向こうに、新宿の高層ビル群を見ることができた。
　西側にはいつも富士山の大きな姿を仰ぎ見ることができる。冬の開催時の真っ白い雄姿と違って、まだ冠雪は見られなかったが、今、省吾が研修で配属されている支店のある街は、その方角の遥か遠くにある。

「どうだ？　初めての街で、初めての一人暮らしは？」
　辰野が手にした競馬新聞に赤色のペンで何か書き込みながら、省吾に尋ねた。
「なかなか楽しいよ。配属先もいい人ばかりだし」
「仕事以外の時間は何してるんだ？　昔みたいにパチンコか？」
「いや、彼女ができた」

それまでずっと視線を出馬表に落としていた辰野は初めて顔を上げた。
「向こうで？」
「そう」
「どこで知り合った？」
「同じ職場の人」
「そうか。でも、省吾、研修は年末までだろう？」
「そうなんだよな…」
　研修期間の３分の２が過ぎようとしている最近になって、省吾は自身でも気にし始めていることを辰野に指摘され、改めて意識せざるをえなくなった。
　梅雨のさなかに仮配属された山あいの地方都市で、盆地独特の暑い夏を迎えた頃に、省吾にとって美里は単なる同僚ではなくなった。当時はやがて訪れる冬のことなど全く想像できずに、新しい環境での新しい出会いに心躍らせる毎日だった。

　やがて、天皇賞のパドックの時間となり、出走馬が周回を始めた。美里は自宅では両親に「競馬なんて観て」と咎められるかもしれないから、合鍵を渡してある省吾のアパートでレースを観ると言っていた。
　本馬場入場から返し馬を見て、省吾は予定どおり９番タマモクロスの単勝を買おうとしたが、とにかく二強に票が集中していて、配当がつかない。しかし、もともと社会人になったばかりの省吾の給料では、せいぜい１レースで３千円程度の購入額であるし、特にこのレースについては馬券での儲けを期待しているわけではなかった。窓口で「９番の単勝を３千円」と声に出し、続けて「それとは馬券を別にして、１番の単勝を３千円」と伝えた。

　省吾は席に戻り、逆光に霞む２千メートルの発走地点を目を細めながら観ていた。少し遅れて隣に座った辰野は、昔から穴狙いだったが、「ボールドノースマンを買ってきたよ。政人に期待だな」と笑った。

　レースがスタートした。南井騎手を背にしたタマモクロスは、ライバルと思われるオグリキャップの末脚を警戒したのか、いつもより前方の位置につけていた。
　一方のオグリキャップは先を走るタマモクロスをマークするように、河内騎手は中団でじっとチャンスを窺っているようだ。
　４コーナーを回る頃にはスタンドの大歓声が地響きのように聞こえてきた。一般的に芦毛は加齢とともに白さを増していく。２頭を比較すれば、より白く見える１歳上のタマモクロスが、脚色の鈍った逃げ馬を早くも捉えて、先頭に立とうとしていた。すかさずその直後をねずみ色という表現がぴったりのオグリキャップが追いかける。前評判通りの一騎打ちになり、スタンドの歓声も最高潮に達した。

　茶色く枯れた秋の芝生の上に、ちょうど夕陽の方向に疾走する２頭の影が長く伸びていた。省吾の目にはその風景が一枚の静止画のように映っていた。一瞬、オグリキャップの末脚に勢いがつき、馬体を並べるかと思った瞬間に、タマモクロスが首を水平に伸ばす独特のフォームでもうひと伸びして、追撃を封じてゴールした。

　最終レース終了後、省吾は辰野と競馬場で別れ、実家に寄ることにした。たまには帰る気にさえなれば、ほんの２，３時間で一人息子である自分の元気な顔を両親に見せてやることができるのだが、夏以降、休日は美里と過ごすことが多くなり、今日は３ヶ月ぶりの実家だった。
　両親と夕食を共にした後、省吾は仮配属先の地に戻るため、最寄り駅に向かった。この時間では既に特急列車はなく、ホームに停まっていた各駅停車の空いているボックス席に座った。
　やがて列車は市街地から山間部に進み、外の景色の大部分が黒い山肌となり、窓にはそのシルエットを背景に、蛍光灯の灯りで照らされる車内と自分の顔が映っていた。省吾はその自分の顔を見ながら、先程まで一緒にいた両親の顔を思い出していた。
　今はまだ50歳代の両親は共に健在ではあるが、今後どちらか一人になった時、自分はどこに配属されているのだろうか。そしてその時、自分の新しい家族は、配偶者は、子どもは…。

　翌日は午前中に月曜定例の会議があり、それが終わると支店長はじめ他の社員は営業活動のため外出していった。社内には省吾と美里とアルバイトの女性のみとなり、昼食時には、弁当を持参していたアルバイトの女性に電話番を頼んで、ごく自然な流れで、二人は支店から数分歩いたファミリーレストランに向かうことができた。
　「はい、馬券。残念でした」
省吾は周囲の客や店員の目に気を使いながら、オグリキャップの単勝馬券を美里に手渡した。
「テレビ観たよ。省吾の言ったとおりだったね。二人ともすごく速かったね」
「馬を２人とは言わないだろう。１頭、２頭だよ」
　以前違和感を覚えた「速い」という表現に加えて、２頭の競走馬を「２人」と言った美里に、省吾は笑いながらそれを訂正した。
「競馬場って広いんだね。一度行ってみたくなっちゃった。ここから遠い？」

「特急に乗って新宿まで行って、それから京王線に乗り換えて…、だいたい２時間強かな」
「ねぇ、一度連れていって」

11月に入り、爽やかな晴天が続いていたが、朝晩はぐっと冷え込み、山あいの盆地はめっきり秋が深まり始めていた。
「どうした？ ぼーっとして」
美里を競馬場に連れて行く約束をした週末の直前の金曜日、省吾が机上の電話機を焦点の定まらない目で見つめていた時、支店長に声をかけられた。
「いえ。何でもありません」
省吾は慌てて机上の書類に視線を戻し、途中だった書類の校正を再開した。
ちらっと斜め右前に座る美里を見ると、心配そうな顔をしていたが、目が合ったのは一瞬で、後は何食わぬ顔をして、二人ともそれぞれの仕事に取りかかった。

ここ数日、天皇賞の日の辰野との会話を思い出すことが多くなった。その度に仕事の手が止まってしまい、それを今日は支店長に咎められたのだ。
研修終了後の配属先については、期間中の勤怠状況や適性を判断されて決められ、本人が希望を述べる機会は与えられていない。そして、仮配属先にそのまま本配属になることはないということは聞かされていた。
省吾は約７カ月前に、社会人としてのキャリアをスタートさせたばかりである。就職先として選んだこの会社で頑張っていこうと、前向きに考えていた。そして、その遥か先の野望としては、将来は馬主になりたい、という夢があったのだが。
一方、美里は、短大を卒業して３年目。この時代の地方都市における、所謂「結婚適齢期」に差し掛かっていた。病気療養中の父親も、パート勤めしている母親も、娘の幸せを願っていることは間違いない。だが、おそらく両親の考える一人娘の幸せが実現するには、それを妨害する人間には身を引いてもらわなければならないだろう。それは言うまでもなく省吾自身であった。

土曜日、二人はいつものように省吾のアパートで夕食を共にし、食後のコーヒーを飲んでいた。
「明日、何時頃に行けばいい？」
美里が明日、競馬に行くための出発時間について口を開いた。
「競馬自体は朝からやってるけど、そんなに早く行く必要もないから、10時頃に駅の改札でいいよ」
「わかった。…ねぇ、省吾。昨日、支店長に注意されてたじゃない？　今もコーヒー飲みながら、何か考え事してるような顔だったよ」
「そんなことないよ」
「本配属のこと？」
「いや…」
美里に言い当てられて、省吾は返答に詰まった。その場しのぎで話の矛先を変えようとした。
「そういえば、最近お父さんの具合、どう？」
「うーん、相変わらずかな。あんまり良くないよ」

「そうかぁ…」
「…。省吾も一人っ子なんだよね…」
　美里はコーヒーカップを持つ自分の指先を見つめながら、消え入りそうな語尾で呟いた。話題はかえって核心に触れる方向に向かい始めていた。美里の言った「省吾も」の部分には、それだけでこの話の持つ意味、結論を表しているようだった。
　二人が付き合い始めてから３カ月が過ぎたが、美里は決して省吾のアパートに泊まることはなかった。徒歩で帰れる近さに自宅があることも理由の一つだが、もう一つ、省吾の存在を両親には説明していないこともあった。それは、美里の方でも二人の行く末を案じていることの証に他ならなかったし、省吾もまた、なぜ両親に自分のことを説明しないのか、と問いただせるわけもなかった。

　帰宅する美里を大通りに出る手前まで送っていき、自室に戻った省吾は、椅子に座り、腕組みをしながら、壁にかかる11月と12月の２カ月分を表示しているカレンダーを、しばらく眺めていた。
　本配属の発表まで約１カ月、遠距離恋愛という単語、美里の両親のこと、「省吾も一人っ子なんだよね」という先程の美里の言葉、将来、馬主となっている自分…。様々な思いや想像が頭をよぎった。
　どのくらい、そのままでいただろうか。省吾は一つ大きな溜息を吐いて、立ち上がり、部屋の電気を消した。

　暦は先日の天皇賞より冬に向かって２週間進んでいたが、東京競馬場は小春日和の穏やかな空気に包まれていた。南向きのスタンドの指定席に座っていると、秋の弱々しい日差しといえども、うっすらと汗を書く程だった。
「この前テレビで観た時より広く感じる。馬が小さくしか見えないよ」
「テレビ中継はカメラのズームで映してるからな」
　美里が席に座って口にした感想に、省吾が答えた。
「せっかく現場にいるんだから、馬を近くで見よう」
　省吾はそう言って席を立ち、美里もそれに従った。エレベーターで１階に降り、パドックに向かった。
　午後のまだ早い時間帯のパドックは空いていて、すり鉢状になっている最前列の柵まで、二人は進んでいった。
「すごい。近くで見ると大きいね」
「あのおなかの白い泡みたいなの何？　汗？」
「あっ、あの馬、今こっち見た。目が合った」
　省吾は、眩しそうに額の前に手をかざしながら、次々に感想を口に出す美里の無邪気な横顔をちらっと見て無言で微笑んで、あとは周回する馬と手元の競馬新聞とに交互に視線を向けていた。しかし、馬券の検討をしているわけではなかった。
　やがて、騎乗合図がかかり、騎手を乗せた馬が次々と地下馬道に消えていった。
「ねぇ、省吾。また考え事していたでしょう？」
　指定席に戻ろうと、二人並んで歩き始めた時、美里が口を開いた。
　省吾が前を向いたまま無言で歩いていると、美里は続けた。
「私たち二人のつきあいのこと、悩んでる？」

　指定席エリアは、横に長く通路が延びていて、８席を１ブロックとした割合で、その横方向の通路から下方に降りていく縦の通路がある、いわゆるひな壇状の構造になっていた。横方向の通路には、胸の高さ程の位置に、もたれかかるにはちょうどよい手すりがある。
　省吾と美里は、パドックから戻ってきて、自分たちの席に座る前に、その手すりにもたれながら、数年前に馬場内に設置されたターフビジョンを正面に見ていた。
「来月…、本配属が発表になる。今の支店に残ることはないのは美里も聞いているよな」
　省吾は正面を見たまま話し始めた。
「それで、その後、どうするか、だ。俺たちは」
　美里は黙っていた。

　程なくして、スタンド内には発売締め切りのベルが鳴り響き、馬券発売窓口前に集まっていた人の群れが戻ってきた、やがて、ファンファーレが鳴り、実況放送とともにレースがスタートした。１番人気の逃げ馬が人気薄の差し馬にゴール寸前で交わされると、歓声と悲鳴と罵声の入り混じった場内の騒音もすっとフェイドアウトした。

「省吾はどうしたいと思ってるの？」
　美里が口を開いた。省吾は答える代わりに、手すりから体を離して、自分たちの席に向かって歩き始めた。ついてきた美里が遅れて座るのを待って、省吾は答えた。
「俺は…、正直言って、わからない…」
　並んで座っていても、やはり先程と同じように視線はターフビジョンに向けたままだったが、答え終わった後に、美里の方に向き直った。
「もちろん、このまま一緒にいたい。今までと同じように時間を重ねていきたいよ」
　今度は若干声が大きくなった。そのせいか、美里は少し驚いたような表情を省吾に向け、その後、自分の指の先を見つめながら、呟いた。
「ありがとう。私も同じ気持ち。でも…、それは無理だよ」

「例えば、省吾の配属先が東京になったとするじゃない？　しばらくは遠距離恋愛も続けられると思うよ。でも、その先は？　私は結局、両親を置いてついていけないんだよね。じゃぁ、そうかといって、省吾はせっかく入ったばかりの会社辞めて、あの街で仕事探して、私と暮らせる？」
　美里は生来の小さな声ではあったが、それでも一息に捲し立てた。省吾が黙っていると、更に続けた。
「だから、仮配属で来た省吾を好きになっちゃいけないって、最初は心にブレーキかけていたんだよ。でも、人間の感情なんてそんなふうに制御できるものじゃないし」
　美里は普段の会話のテンポに戻しながら、照れ笑いを浮かべて、省吾に向き直った。
「でね、私はいずれごく近い将来に終わりが来るにしても、それまでを精一杯自分の気持ちに正直に過ごすことにしたの。そして、いざ、別れる時が来たら、後悔しない、相手を恨まない、その後連絡は取らない、って決めたの」
　省吾は、まず別離の瞬間の二人を想像して、次にその後音信不通になった二人を想像した。それだけで現実になる前から受け入れがたい気がして、顔が歪んだ。
「今日も、せっかく省吾と出会って、それまで縁もゆかりもなかった競馬に連れてきてもらったんだから、今のこの二人の瞬間を大切にしたいの」
　しかし、美里にそう言われて、省吾はその意思を尊重するより他はなかった。

　富士ステークスに出走する馬が馬場に入場してきた。場内アナウンスが流れて、競馬新聞に目を落としていた美里が顔を上げた。
「私ね、前にテレビで観てから新婚旅行で行きたい場所があるんだ。フロリダのキーウエストって知ってる？」
　省吾は首を振った。
「そこにセブンマイルズブリッジっていって、エメラルドグリーンの海の上をずっと延びている橋があって、そこをドライブしたいんだ」
　省吾は「新婚旅行」という単語を聞いた時から、当然美里を助手席に乗せ、その橋の上をドライブしている自らの姿を思い浮かべたが、美里は続けた。
「まぁ、新婚旅行なんて、誰と、いつ、行けるか、わかんないんだけどね」
　そう言うと、視線をターフビジョンの方に移しながら、寂しそうに笑った。

「なんで急にこんな話をしたかっていうと、ほら、この６番の馬の名前、セーラムドライブって書いてあるじゃない？　セーラムっていうタバコあったよね？　あれ、箱がエメラルドグリーンじゃなかったっけ？」
「ああ。メンソールだし、そんな気もする」
「それにドライブがついてるんだよ。私はこの馬に賭ける」
「単勝にする？」
「１位になればいい馬券？」

「そう。１位とは言わない、１着だけど」
「ああ、ごめん。１着だね。でも、それだけだとつまんないかな…。あっ、この青空を想像するスカイチェイスとの組み合わせも買ってみようかな？」
「それじゃ、１、２番人気の組み合わせだよ。配当つかないよ」
「当たっても損するの？」
「いや、他に買わなければ、当たれば損はしないけど」
「じゃぁ、セーラムドライブの１着の馬券と、この２頭の組み合わせを買う」
「わかった。買ってきてあげるよ。いくらずつ？」
「いい。せっかく連れてきてもらったんだし、自分で買ってみるよ」
　美里はそう言って立ち上がり、馬券売り場の方へ歩いていった。省吾は美里がうまく買えるかどうか不安になり、少し遅れてついていった。

窓口で買い目を伝えている美里の姿を離れた位置から見守っていると、馬券を受け取った美里が歩き出してすぐに省吾を認め、笑みを浮かべながら小走りで駆け寄ってきた。
「ちゃんと買えたよ。ほら」
美里が差し出した馬券に間違いがないことを確認してから、省吾は自身の分を購入し、二人は席に戻った。暫くして、レースはスタートした。

「どこからスタートしたの？」
「あっち」
美里の質問に、省吾は１、２コーナー中間の方角を指差した。
「セーラムドライブは今どこ？」
「今、２番手だな。緑色の帽子だから」
ターフビジョンの画像には向正面を走る馬群が映っており、セーラムドライブは楽に追走しているように見えた。
直線に向くと、逃げ馬が早めに失速し、セーラムドライブが先頭に立った。
「あっ、あの緑の帽子、そうだよね」
美里が興奮気味に口にして、ターフビジョンと眼下の直線とに交互に視線を移し始めた。
「あー、これはもう楽勝だな…。あっ、追いこんでくるのはスカイチェイスだ」
省吾も残り１ハロン標を通過していく馬群を見ながら、ビギナーズラックに苦笑しながらも、自分のことのように嬉しかった。
「やったー！」
３馬身程千切って緑帽がゴールした瞬間に、美里は喜びの声を上げた。
「セーラムドライブ、強かったな。２着もスカイチェイスでバッチリだ」
省吾も一緒になって喜んだが、次の瞬間、顔を自分の方に向けない美里の目から、一筋涙がこぼれたのを見逃さなかった。

１ヶ月後、省吾は東京へ配属が決まった。支店の同僚が催してくれた送別会では泥酔してしまい、一次会で帰宅した美里の自宅に、夜遅くにもかかわらず、つい電話をしてしまった。
電話口に出た美里の母親は、明らかに酔っている男からの夜更けの電話に対し、声を荒らげるでもなく、静かに言った。
「美里は、もうかけてこないでほしい、とのことです。あの子も辛いんです。わかってあげてください」
省吾は非礼を詫び、電話を切ってから初めて、掛け替えのないものを失ったことに気づいた。

その後、省吾は東京勤務になったこともあって、競馬は続けていた。翌年のジャパンカップでのオグリキャップの走りは感動して涙が出た程だった。しかし、美里との別離を選んでまでも当時こだわった勤務先は、バブル崩壊後の長い不況により、省吾の勤続20年を目前にして倒産してしまった。

一方、美里は28歳の時、県庁勤務の地元の名家の次男と見合い結婚をした。それを省吾が風の便りで聞いたのは、もっと後になってからだった。
昭和という時代の、省吾にとっての４コーナーを回り、ゴールまでの長い直線に向いた時には、年齢的にはまだまだ余力十分のはずだったが、残念ながら、情熱を失ってしまっていた。

平成の元号も二十数年になろうとする今、省吾は当時からずっと変わらず独り身のまま、何とか入社できた転職先に出勤するため、PCの電源を落とし、冷めたコーヒーを一気に流し込んだ。

【完】

小春日和のセーラムドライブ

http://p.booklog.jp/book/4127

著者 : satsukiya
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/satsukiya/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/4127

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト